

経済マンスリー [アジア]

アジアで進展する通貨高

足元でアジアへの資本流入が加速している。海外マネーの主な受け皿となっているのは株式市場で、12月のアジア主要国の外国人投資家の株式売買額(ネット)は軒並み買い越しとなった(第1表)。1月に入ってもアジアの株価は上昇傾向が続いているが、とりわけ、景気が堅調な ASEAN が好調である。2012年に38回にわたり史上最高値を更新したフィリピンでは、年明け以降も高値更新が続いており、タイは1月に約17年ぶりの高値を記録した。株高の背景には、中国を中心にアジア経済の底打ち期待が高まっていること、米国の「財政の崖」が回避され投資家のリスク許容度が高まったこと、などが挙げられる。

資本流入を受け通貨高が進んでいる。各国ともに現行水準の通貨高は概ね容認しているものの、その温度感は国・地域によって異なっている。アジアの中で通貨高を最も警戒しているのは韓国である。韓国ウォンは、対ドル上昇率は小さいものの、対円での上昇率は高い。韓国は日本と輸出品目が競合することから、政府は通貨高に強い懸念を抱いている。韓国ほどではないが、タイ、フィリピンも通貨高に警戒感を示している。年明け以降、タイパーツの上昇が顕著で、1月の対ドル上昇率はアジア主要国・地域の中で最も高い。かつて通貨危機の震源地となったタイは資本流出に敏感で、2006年12月にはパーツ高抑制のため、突如資本流入規制を打ち出し市場を驚かせたこともある。一方、これらの国とは対照的に、輸出依存度が比較的低いインドネシアとインドにとって通貨高は追い風である。両国は経常赤字を背景に通貨の下落圧力が強く、通貨安阻止が課題であったためである。

アジア経済は持ち直しの動きがみられるが、景気回復の起点となる輸出は最悪期を脱したものの、回復ペースは緩やかである。アジア主要9カ国・地域の輸出は、9月に前年比プラスに転じた後、11月まで5%前後の伸びにとどまっている。一段の通貨高が進んだ場合、上述の韓国やタイなどでは輸出の下押しを通じて、景気回復の芽を摘むおそれがある点には注意が必要であろう。

第1表: アジア主要国の外国人投資家の株式売買額(ネット)

	(億ドル)				
	12/2Q	3Q	10月	11月	12月
韓国	▲ 4,286	7,918	▲ 1,072	▲ 501	3,307
タイ	▲ 612	49	▲ 583	201	754
フィリピン	1,207	576	▲ 214	192	383
インドネシア	▲ 877	1,506	277	▲ 319	13
インド	▲ 120	8,141	3,646	1,805	4,905

(注)インドは株式、債券の合計。その他の国は株式のみ。
(資料)CEICより三菱東京UFJ銀行経済調査室作成

第2表: アジア主要国・地域の為替月間騰落率

	為替(対ドル)			為替(対円)		
	12年11月	12月	13年1月	12年11月	12月	13年1月
中国	0.1	▲ 0.0	0.1	3.6	4.2	4.2
台湾	0.5	▲ 0.1	0.2	4.2	4.6	4.0
シンガポール	▲ 0.0	▲ 0.1	▲ 0.6	3.6	4.2	3.7
韓国	0.7	1.1	0.7	4.1	5.9	6.5
タイ	▲ 0.0	0.2	3.0	3.4	5.2	6.9
マレーシア	0.4	▲ 0.5	1.2	4.0	3.8	5.6
インドネシア	0.1	▲ 0.9	0.0	3.8	4.0	3.8
フィリピン	0.9	▲ 0.8	1.5	4.0	4.1	6.2
インド	▲ 0.8	▲ 0.5	1.6	2.8	3.9	5.9
ベトナム	▲ 0.0	0.1	▲ 0.0	3.6	5.0	3.8

(注)1.前月末からの騰落率。13年1月実績は1月21日時点。
2.シャドウは為替(対ドル)1%以上、為替(対円)5%以上上昇した国・地域。
(資料)CEICより三菱東京UFJ銀行経済調査室作成

照会先：三菱東京UFJ銀行 経済調査室 矢口 満 mitsuru_yaguchi@mufg.jp
竹島 慎吾 shingo_takeshima@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しく願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当室はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。また、当資料全文は、弊社ホームページでもご覧いただけます。